

第18号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十五年五月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

春の憂鬱 胃弱亭骨人	1
薄紫 奮闘記その三 高阪博一	3
門本君 小野村新 (後編)	16
病気になつて 魅華	29
卒園に向けて ゆきんこ	33
俳句 花吹雪・他 彩 華	36
詩 しんだ か… 大西亥一郎	38
アクトス写真館	46
シヨートシヨート	
原稿用紙 1 30 高阪博一	47
なにしてる 大西亥一郎	48
編集室から	51

春の憂鬱

胃弱亭 いじやてい 骨人 こつじん

耳元にしつこくまとわりつくアラーム音にようやくげだるい身体に気合いを入れてベッドから立ち上がる。おぼつかぬ足で窓辺に寄りカーテンを開けると、ああ何と、青空が広がっているではないか。一瞬のときめきの後、私の心は憂鬱になる。あいにく今日の予定は何もなく、この後の行動が全く定まっていないからである。

若い頃から室内で過ごす趣味を持たぬ私は、外に出て肉体を駆使することでしか充足感を得られず、目的もないままそこいらを徘徊することもしばしばである。ましてやこの青空の下、天気の変わらぬうちに何処かへ出かけねばならぬという責務と、何処に行つてよいかわからないという焦燥感の狭間で私の心はますます憂鬱になつてしまふ。いつそ朝から雨でも降つてくれたらあきらめて家に籠り

部屋の整理でもできるのだがと、雨乞いをしたくなる時さえある。人間は「為すべき事が無い時は何事も為すべきではない」のであろうが、小心なる私は、こんな日に悠然と家に居着けず、必ず何事かを為さんと焦るのである。

食後の一服を済ませ、トイレの中でその日の行動予定を確認して快く一日のスタートが切れるのだが、何の予定も無い日は、さて何をしようかと悩む分だけトイレに籠る時間も長くなる。

自由の身にあこがれて迎えた定年後の生活であるが、退職後しばらくは「自由な時間」をもつ幸せに浸っていたものの、半年あまりもせぬうちにその「自由」に苦痛を感じだした。人間は束縛の中でこそ自由を求めるもので、束縛の無い生活の中では自由の喜びなんて味わえないものである。實際たまのボランティアで一日中体力と神経を費やした後には味わう充足感と解放感には実に快いものである。

よほどのことがない限り、日中を家で過ごすことの出来ない私のような年金生活者にとつて、老後の生きがいは、「教育と教養がある」ことである。おつと漢字の変換ミスであつた、正しく表記し直そう。老人の生き甲斐は、「今日行く(とこ)」と今日用がある「こと」となる。今日行くべき所があることと、今日済ませる用事があることのと幸せな事よ。

のどかな春の日、行くところもなく、これといった用事もない私であるが、いつまでも家に籠もつていてはもつたらないと、行き先も決まらぬまま家を飛び出して、行く着くところは結局通い慣れた鴨川ということになる。そして、最近は見かけなくなつたあのホームレスに占拠されていたいつものベンチの日溜りの中で、焦点の定まらぬ目を川面に向けながら、たまにやつてくる野良猫の相手をして一時を過ごすしかないのである。

そこで一句

「起きたけど寝るまで用の無い私」



薄紫 奮闘記その三

高阪博一

扁平な頭部を持った細長い怪物が、向こうから一直線に迫ってくる。キラリと陽を反射して光る。凄いスピードでポツと大きく空気を切り裂き、太い振動を伝えてきた。見上げた斜め上の高架を、あつという間にグレーの巨体を通り過ぎて行った。

いつもの散歩道。小川の堤にベンチがある。桜並木はまだ蕾のまま、枯れ枝が寒々しい。腰を下ろして、五十メートル程度向こうにある新幹線の高架を眺めていた。昼食を済まして出てきた。今、午後一時頃だろう

か。気楽な身の上なので、時計をして外出は先ずしない。見上げると、陽が眩しい。抜けるような青空、どこか焦点が定まらない。坐つていても、冷たくはない。

小川のせせらぎが銀粉を撒いたように、光を放っている。少し前はサーと早い流れであったのが、サラサラと緩く流れるようになってきた。確実に季節は移っている。頭上の蕾が膨らんで色づくのに、それ程時間は掛からないだろう。

歩く人をぼんやり眺めていると、トントんと肩を叩く者がいる。振り向いた。薄紫さんだ。通称・紫さん、わたしには見えるが、ほかの人には見えない。妙齡

の女ゴーストだ。薄っすらと口元に微笑みが浮かんでいる。

「久しぶり。どうしてたん？もう、わたしを忘れたのかと思つた」

「本当に久しぶりです。忘れてなんかいませんよ」と例の低い声で呟くように言いながら、わたしの傍らに紫さんは坐つた。

髪型がショートカットから、ちよつと長くなつて首の付け根辺りで内側に巻いている。紺地のコートの端から、コーデュロイの焦げ茶色のズボンが伸びて、濃いワインレッドのバックスキンの靴が見える。以前とは違つた。落着いた雰囲気を感じさせた。「いい天気ですね。もう、どれ

位になります、明石で別れてから」と紫さんが尋ねてきた。何が弱くなるかといつて、記憶力ほど衰えるものはない。元が弱いから尚更だ。年金生活に入っている者に聞く台詞かと思つたが、

頭を捻つてみた。去年ではない。平成二十四年は忘れもしない。最悪の年だつた。

一月の初めに家で転んだ。折り込み広告が床に落ちていて、それで滑つたのだ。その時大きな音がした。何か落ちたのかと思つて辺りを見回すと、別に落ちていないものはない。起きようとした。ヘナヘナとその場にまた倒れてしまった。左足首の辺りが急に痛くなりだした。足首に力が

入らない。曲げようとしても、その意志が足に伝わらない。そうりと触つてみた。アキレス腱が中央辺りで凹んでいた。切れたのだ。

女房の肩をかりて、自動車で乗り病院へ。運転しながら、「それにしても、上手いことこけたね。ほんと、ツル、ストンつて感じやつたわ」と女房が笑いを囓殺しながら喋つていた。多少は同情を示しても良いのにと、言い返す気にもならず、痛いのを我慢しながら、恨めしげに聞いていた。

入院は二ヶ月。梅が仄かに香る頃、やつと退院できた。年齢の故か、なかなか思うように歩け

ない。桜が散つて、青葉が優しい陰をつくり、五月雨が通り過ぎていった。また切れそうな気がして、仕方がない。骨折箇所は強くなるそうだが、腱の切断箇所は脆くなるそうだ。入院仲間が退院して、またすぐに切つたという噂を聞いた。歩くのが怖くなつてきた。家に籠りがちになり、やたらと太り出した。腹は弛んで、二段ではきかず、三段になっていた。

布袋さんのようになつては余りに見苦しい。スリムになり、足にも負担が掛からないものはないかと考えた末、水泳をやりだした。蟬のなく頃、一キロほどの所にあるスポーツクラブに、毎

日ゆつくり歩いて通った。汗は容赦なく首筋を伝わった。そこで、野菜を中心としたダイエツトメニューも作って貰い、兎のような食生活を送った。

菊の品のある匂いが終ると、紅葉が鮮やかになつていく。徐々に体重が減つて、元に戻りだした。珍しく粉雪が舞う頃、やつと以前のように歩ける足になつた。まったく、散散な一年だった。

こんな変な年は記憶が鮮明だ。紫さんには会っていない。一昨年だ。そう、平成二十三年。思い出した。紫さんが笑っている、そんなことは分かっていますよという顔をしながら。ゴース

トの紫さんが分からぬ筈はない。人が悪い。いや、霊が悪い。

「あの時、明石駅からタコフエリーを回つて、浜国道の交差点で別れましたよね。何とか言つた同人の例会に行く時。えーとアミダスイやアミドス、そうアミウス。もう二年になります。早いですね」

紫さんがしみじみした口調で言うのだつた。

「それでも、注意はしていましたよ、あなたのことは。入院中も、リハビリ中も。プールを泳ぐのではなくて、歩いているのには笑つてしまいました。まあ、あれも訓練なのでしょうね」

「そうですね。結構、体力使うん

やから。目に見えて細くなつて、楽になつてきたもんね。紫さんのようなゴーストには、体重、関係ないやろうけどもね」

わたしは忌々しげに答えを返した。あんな痛くて、きつくて、不安なことはもうコリゴリだ。

「この二年、ほんとにわたしも大変だったのですよ」

「何か、あつたわけやね。どうしたん？」「なかなか、この世の人には理解しがたいことが、あの世には多いものなんです」「分かり易く、教えて欲しいなあ。紫さんがこの世に興味があるように、わたしもあの世に興味がある。もう、そろそろやしね」「また、

冗談言つて。まだまだ、この世に執着充分じゃないですか」「源氏を読み切るまではね。いま、十五帖の『蓬生』の最初やから、まだまだ先が長い。読み終わつたその時が、この世の名残になればねえ……」「言いましたね。格好いいじゃないですか。読了即彼岸。何とかいうお経のようで」紫さんが薄らと笑みを浮かべて、口の端を動かした。何か頭の中を整理するように、暫く黙り、そして口を開いた。

「昨年始め、紫式部先生が転生することになつたんです。先生ほどの有名人は転生猶予があつて、本人が言い出さない限り、あの世にいられるんです。なのに、

先生は転生を自分で言い出されたんです」

紫さんは呆れたように空を見上げながら、話を続けた。

「『味気無しや』とおつしやるんです。あの世にも、文壇があります。それはもう、うじゃうじゃ有名作家がいるんです。そのなかでも、世界の源氏物語、作家中の作家、紫式部ですものね。彼岸作家協会会長ですから、表立つて、誰も先生に反対を言えるモノがないのです。先生はそのことを気にして、悩んでいらつしやいました。『ヒトあまたおれば、衆議なるべし』と。それで、あのヒトに相談されたのです。それが揉め事の始まりです」

紫さんの顔が悲しそうに曇つてきた。生来の野次馬根性が頭をもたげてきた。こんな話はめつたに聞けるものではない。どうも、あの世もこの世とそれ程変わりがないうのだ。わたしは興味津々となつた。

「相談した相手は？」

「納言先生かなあ……」

「はあ」

「清少納言先生、副会長なんです。『お清ちゃん』『光さん』って呼び合う仲だったのです。格式を重んじるあの社会で、こんな呼び方、あり得ないことなんです。分かりませんね。あんな風になるなんて」と紫さんの声のトーンに張りが無い。

「お二人の話し合いで、女二人
だけでは考えが偏る。先ず男を
一人入れて、三人の合議制で協
会を運営していこう、もう一人
副会長を置こうとなつたんです。
その副会長がなんと兼好法師
先生」

紫さんの話が益々面白くなつて
きた。兼好法師が出てきた。あ
の世のことだ。この世の人は例外
なくいくところなのだ。誰がいて
も不思議ではない。

「それで、兼好法師が副会長
になつて、どうなつたの？」とわ
たしは先を促した。

「三人になると、普通二対一で
しょ。女二に対して男一と思つ
ていたのですが、女一対オシナオトコ女男

二になつてしまつたんです。紫先
生対納言フラス＋法師先生の構図
です。納言先生の陽気な知性と
法師先生の陰気な知性が、陽
と陰でびつたり嵌つたんでしょ
ね。そこで、作家同士ではなくな
つて：。」と紫さんが顔を曇らせ
て喋つている。

紫さんは知らないようだ。男
女の仲の微妙さ加減を。絵に描
いたような三角関係じゃないか。

今まで仲の良かった女同士に男
が割り込んでくる。最初は女二
人が反発する。何かきつかけが
起こる。その時を境にして、男女
関係が出来上がり、もう一人の
女は孤立してしまふ。まるで、
安物のＴＶドラマだ。あの世もレ

ベルはこの世並み、ということな
のだろうか。

「紫式部先生は『恋』の大家
です。二方がフツナそうなつても、理解
されると思ふのです。それなの
に、『あはれなりけり』を連発さ
れて、会長を辞職し、藤の花へ
転生を阿弥陀様に願ひ出られ
たのです。先生のような大物の
願ひは無条件です。そのまま転
生されました」

顔を曇らせて、紫さんが言い、フ
ーと溜息をついて、また話し出
した。

「あとに残つたわれわれ紫文
藝工房のモノは散り散りになつ
てしまいました。その時、工房の
皆は『女同士の特別な関係だつ

たからでは……』と言ひ合つていましたね。あれ程の大家でも、特に『恋』という世界では、予期しないことが起こると、動揺が激しいのでしようね」と紫さんがアアという感じで、しみじみと静かに言うのだつた。

いつもの快活さが消えている。元氣付けようと思つて、「コーラ、買おてこようか」と向こうに見える自販機を見ながら、紫さんの好物を言つてみた。「いま、欲しくありません」と紫さんは短く言うのと、黙つて前を通り過ぎて行く人たちを見ていた。

一匹の犬が近づいてきた。初

老の婦人に連れられた小さな黒い犬だ。所々白い毛が混じつ

ている。特に口の周りに白いものが目立つ。目はくりつとして丸く、ちんまりと上を向いた鼻が可愛い。横にいる紫さんをじつと見ている。動物は特別な感覚を持つているのだろうか。人には感じられないゴーストを明らかに感じていようだ。紫さんが背中を撫でると、松ぼつくりのような尻尾を千切れるほど振るのだつた。婦人がその様子を不思議そうに見ている。犬はわたしではなく、横のあらぬ方向を見ているのだから。婦人には紫さんは見えない。

「可愛い犬ですね」

「ありがとうございます。懐いてますね。この子は女性が好きな

んです。男性は同性やからいつも吠えるのに、不思議ですわ」
「余程、今日は機嫌がいいのでしようね」

「きつと、そうですね。それにあなたと相性がいいのかも」

「犬にも相性がありますか？」

「ありますとも！うちの主人なんかは吠えられて、ばかりですよ。やはり、ひとの差ですね」

婦人はニタリと笑つて、犬と共に堤を上流の方へ去つていった。

「可愛かつた！」嬉しそうに紫さんが言葉を漏らした。ちよつぱり、心が晴れたようだ。

「工房が解散して、さて、どうするか。皆、自分の行く末を考えたのです。先輩方はいろいろこ

ネがあつて、他の工房に移つて行かれまして。紫文藝工房で働いていたといへば、それなりの知識や技能が身に付いており、雇う方も安心なんです。それでも、独立は難しかったですね」

「どうしてなんですか？皆さん、実力があるんですよ。紫式部先生のお弟子さんやもの」

「後ろだてがないじゃないですか。やはり、大物が付いていないと、あの世でもなかなかね。何とかの沙汰も金次第ですものね」

紫さんの顔がまた曇りだした。今日の紫さんは晴れたり曇つたり、忙しいことこの上ない。

「惨めなのは、わたし達、アシスタント・クラスです。墨を磨つ

たり、紙を揃えたり、お茶を入れたりするのは、まあ誰でも出来るわけですよ。就職口がないのです。あつたとしても、二、三時間の非正規雇用ですよ、生活できませんもの。ほんと、就活、大変だったのですから。幾つもの工房に断られ、履歴書ばかり書いていましたね。ちよつと鬱にもなりました」

もうコリゴリという感じになつて、紫さんが遠くの方を眺めている。新幹線がああ大きな音を残して、また通り過ぎて行つた。

「就活止めて、婚活に切り替えるモノもいましたね。美人は得だどつくづく思いました。男つて、ちよつと綺麗だと、すぐに言

い寄るんです。皆、和歌は式部仕込だから上手ですよ。焦らして、喜ばして、また焦らす。もう、男はメロメロになつてしまいましたね、その手管で」

「紫さんも美人だから、そんな手もあつたんじゃなかつたの？」

とちよつと失礼とは思つたが、わたしは聞いてみた。

「わたしのような髪の短い、丸い目の、小さな顔で、ボーイッシュな女はもてないんです。色白で、髪が長く、引目の下膨れ顔もてるんです。結局、婚活も失敗しました。これで、ええい、ままたよと物語を書いて、新人作家募集に応募したんです」

紫さんの顔がぱつと明るくなつ

た。声のトーンも上がり気味で、こちらの方も期待を持って、紫さんを凝視した。

「それで、応募作品はどうなったの？」「新人最高の『紫清賞』を取ってしまったんです。それはもうびつくりしましたね。運が良かったんですね、きつと。上手い人がいなかった」と悪戯っぽく、紫さんが笑った。チャージングで女っぽい笑顔だ。曇り顔は美人に似合わない。

「運で、賞は取れんでしょう。実力があつたんや。どんなものを書いたの」
わたしは下手な駄洒落を言いながら、本の内容を聞こうとした。紫さんの顔に躊躇いの色が

見えたが、すぐに口を開いた。

「題は『たまゆらの涙』と言います。若い女が老境に入った男を好きになる。その男には妻がいる。若い女はその男を奪いたいと思う。艶やかな張りのある白い肌、豊かに隆起した胸、緩やかな波のような腰、蜜を湛えたところに向つて滑っていく腹。老境の男を狂わせるには、充分すぎる肉体という武器を使ったのです」

紫さんの顔が赤らんで、言葉が止まった。純情な割りに、大胆なことを書くものだとなんか思つた。初めて会つた時の姿が不意に浮かんできた。グリーンポロシャツに紺地のGパンを穿

いた、未だ成熟を待つ薄っすらと紅い林檎のような姿が。

「それで、その先はどうなるの」と言おうとしたが、わたしは言葉をぐつと飲み込んで、紫さんが話し出すのを待った。昼下がりの気だるい光が二人、いや一人とゴーストを包んでいた。

「男は若い女に走ります。残されるのは老境の妻。一度の春が過ぎ、二度目を迎える頃、若い女に男が出来るのです、それも若い男が。老境の男は愕然とします。女に詰め寄ります。『どうして、あの男におまえは惹かれてしまったのだ。何一つとして、不自由はさせなかつたのに』と。『どうしても、あなたがわたしに

与えられないものが、一つだけあつたのです』『それは？』『皺ひとつない、耀くばかりの肉体です』老境の男はただそれを聞くしかなかったのです。女に去られた男は絶望の余り、己の命を絶ちます。妻は何も言わず、涙が一滴、頬を伝わっただけです。こんな内容なんですけど」

「ざつと聞いただけなので、難

しいけど、その手の話は多いんじゃないの。女に逃げられた老いた男の話何かは」

「そうでしょうね。どこにでもあつた話ですよ。話の内容じゃなくて、描写なんです。先ず、口語体で書いたことですね。次に、先ほどの身体の描写もそうですね」と紫さんが言つた後、一呼吸置いてまた話を続けた。

「例えば、あの世では、男女の関係を『情け情けしく、契り給う』というような表現で終つてしまします。先生の源氏物語はその典型でしょうね。婉曲叙法というんでしょうか。それを直接的な表現で、男女の情交を描いたのです。『男が単ヒトユの胸元をく

つとあけると、女の波打つ乳房は男を誘うように緩やかに揺れている。男の唇は容赦なくその豊かな胸を這い回つた』というように。特に、女を小悪魔のように、肉感的で、男を惑わすように描きましたから。それはもう一大センサーシヨナルを巻き起こしましたね」

紫さんが恥ずかしそうに顔を赤らめた。その程度の表現で、騒動を起こしているなら、この世では週刊誌や新聞も読めそうもない。パソコンなどを見たら、紫式部先生は卒倒するだろう。あの世のことは、ほんと、分からないことが多い。

ひよつとして、紫さんはそんな

経験をしたのだろうか。不躰とは思ったが、聞かずにはいられなかった。

「紫さん、そんな経験したのかなあ」

回りにくい言い方よりストレートに聞いた方が、嫌らしくないと思い、わたしはそういう聞き方をした。

「する訳ないでしょ。すべて、想像です。女ばかりの職場だったから、それはもう直接的ですよ、その手の話は。毎日、聞いていたら、そら『耳年増』になりますよ」

「へえ、想像でね……」

「信じていないようですね」

「いや、そんなことはないけど。や

っぱり、才能があつたつてことなんやろうね」

「ありがとうございます」

紫さんが嬉しそうに頭を下げた。どう見ても大胆なことを書いたり、蠱惑的な人物を考え出したりするようには見えない。確かに落ち着いた雰囲気になつてきている。会わなかつた歳月が

紫さんを変化させているのも分かる。それでもわたしの横に坐っているのは、大人の女になりかかっているが、やつと、その扉を叩いたという感じの可憐さも残すゴースト、紫さんだ。何気なく、視線が合った。何か言いたそうだ。

「お願いがあるんです」

「どんなことなあ。出来ることな

ら何でもするよ。紫さんには、初めて会つた時、うーん、ええつと、」

「二回目の一年前、平成二十二年です」

「そう、その時から、世話になり通しやもんね」

「無謀にも、源氏物語を古文で読もうとして、四苦八苦。紫式部先生が見るに見兼ねて、教えに行けどこの私にお命じになつた。いろいろ、お教えしましたよね。『古文の読解』という本なんかを紹介したりして……」

懐かしそうに紫さんがあの頃のことを口にした。回顧談は得てして長くなるものだ。話を元に戻して、紫さんのお願いとやら

を、詳しく聞いてみよう。

「それで、お願いつて？」

「そうそう。あなたを好きになつてもいいですか」

「はあ」

「あなたを好きになるつてことで
す」

まるで、それでは紫さんの小説
を實踐しようということじゃな
いか。自分が描写した世界と
『生の人間』とはどう違うのか、
観察でもしようというのだろう
か。

「ちよつと、待つて。そんなこ
と、突然言われても、こちらに
も、それなりに心の準備とい
うものが要るでしょ。それにし
て、どうして、そんなことを、言

うの？」とわたしは多少上ずつ
た声になつて、質問してみた。

「経験がないからです。あの小説
は頭で考えたものです。全く想
像なんです。今の人気なんて、
まるでシャボン玉みたい、何かの
拍子で壊れて消える。そんなも
のに成りたくないんです。中味の
ある、確実なものになりたいん
です。だから、恋の経験をしたい
んです」と紫さんの話が熱を帯び
てきた。

思つた通りだ。わたしにとつて

は満更でもない話なのだが、あ
の世にはごまんとすばらしいヒ
トがいるはずだ。選りに選つて、
この世の人間を選ぼうなんて、
恋しいひとに幽霊が逢いに來る、

まるで『牡丹燈籠』の世界じゃ
ないか。わたしには理解できな
い。

それにも増して、こんな年寄
りを選ぼうなんて、どう考えて
もおかしい。確かに、歳の差が大
きい恋愛や結婚は、最近よく耳
にする。あれは打算もあるよう
に思う。相応の歳の者同士が恋
愛し、結婚するのが自然とい
うものだ。紫さんとは、如何に考
えても不自然だ。

「冗談はやめてよ、紫さん。そ
ら、嬉しいよ。例え、ゴーストで
あつてもね。よく考えてよ。あ
なたはあの世でわたしはこの世
にいるんしょ。世界が違うでし
よ。それに、わたしには妻がいる

でしょ。それは無理というもの
違う？」

わたしの声は若干大きくなっ
た。前を行き交う散歩の人たち
は怪訝そうにわたしを見て、通
り過ぎて行く。「こんな大きい
声、一人で張り上げてるの、お

かしいわ」というような顔をし
て。彼らには紫さんは見えない。
老人が一人、ベンチに坐つて騒い
でいるのだから、痴呆か、何かと
思っているに違いない。

「どうして、無理ですか。違
う世界にいるからこそ、常識や道
徳や肉体なんかに囚われる必
要がないでしょう。まったく自由
に、慕^{オモ}いのたけをぶつけ合える
と言えませんか」と紫さんの顔が

真剣にこちらを向いて、わたし
の返答を待っている。

「紫さんはわたしの先生でしょ。
先生が生徒を好きになるなん
て、わたしの辞書には書いてない
よ」とわたしも妙な言訳をし出
した。

辞書に書いていないなんて、我
ながら吹き出しそうだ。まるで、
ナポレオンじゃないか。陳腐な
言訳だ。ドギマギしているのが分
かる。こんなチャンスはめつたに
ない、いや、皆無に違いない。自
制心など棄ててしまえと囁く
声が、どこからともなく聞こえ
てきた。

「それに、好きになるのに、相
手の許可が要るっておかしいと

思えへん。好きになるのは、自然
なことですよ。その何というか」
「一緒に、いるうちに、互いが自
然と寄添つていくつてことです
か」

「そう。つまり、恋の花が咲くの
を待つもんなんです。紫さん、分
かる？」

何とも、また陳腐な台詞を言っ
たものだ。青い薔薇が創り出せ
る時代だ。咲くか咲かぬか分
らない花を、じつと待っているな
んで、余りに温過^{ぬる}ぎる。相手の
返答次第で、攻めるなら攻め
る、引くなら引くと、最初から
決めて恋をするのも、有りかも
しれないとわたしは思い始めた。
「いいよ、紫さん、わたしを好

きになつても。妻が居るけど、どうなつてもいい。紫さん、OKですよ、好きになつてもらつて」とわたしは嬉々として答えていた。紫さんが微笑んでいる。わたしが妻を棄てる決心をして、答えているのに、何も言わずに、こちらを見ているだけだ。

「何か言うてよ」とわたしは次第に焦りを感じ出してきた。わたしと紫さんの間にヴェールが下りてきた。どことなく紫さんの影が徐々に薄くなつていく。何か明るい光が臉を照らし出してきた。

チャイムのような音が聞こえた。「ええ、この音は」と思つてい

ると、次第に焦点が合つてきた。大きな細長い壁のようなものが見えてきた。歓声も聞こえるようになってきた。向こう堤に学校がある。そのシルエツトがはっきり見えた。休憩時間なのだろうか、生徒達が楽しそうに走り回っている。

陽が眩しい。多少斜め上にあつたのが、真向かいに来ている。どれ程の時間が過ぎたのだろう。「夢やわなあ。あんな若い女コと恋愛出来る訳ないよなあ。奥さん、棄てるなんて、そんな怖いこと、ようせんわ」自嘲気味にわたしは口走つた。それを掻き消すように向こうの方から、あの

怪物が大きな唸り声を立てて、わたしを襲うかのように、通り過ぎて行つた。

了



門本君

小野村新

二

残暑の厳しい年であつたが、彼岸に入るや、急にしのぎやすくなつた。この頃になると、吹く風も変わる。寂しさを募らせ、人恋しさをかきたてる風である。三月の風が官能のうずきを呼ぶ質のものであれば、九月の風はプラトニックな恋心をそそる。そう考えてみれば、この時期は見合には適していると言えそうだ。

「紅屋」はこぢんまりとした造りの料亭である。料

理が調うまで、縁側で庭を見ながら歓談した。お互いの親の希望もあり、ここに居るのは見合いの当人どうしと私たち夫婦の四人である。

なかなか趣のある庭である。整然と刈り込まれた生け垣からこちらに伸びている、一見無造作に敷き詰められた飛び石を配した小道。その右手に、大きな岩で囲まれた、この庭にしては不釣り合いなほど広い池があつた。池では何匹もの大きな錦鯉が悠然と泳いでいる。

「こんな庭のある家に住みたいものだね」と、誰にもなく言うと、

「そうですね。でも、このような庭はたまに見るからいいんですよ。自宅にこの種の庭があつたら三日で

飽きるでしょう。それに何と言つても、陰鬱ですよ。家の庭はやつぱり、芝生の中にちよつとした花壇のある、明るい方がいいですよ」

門本君らしいことを言う。

「小坂明子の歌つた庭だな」と応じると、早苗ちゃんがくすくすと笑つた。ずいぶん以前に流行つた歌なので、早苗ちゃんは知らないと思つていたのだが、最近リバイバルソングとして脚光を浴びたらしい。

食事が調つた。門本君と早苗ちゃんは斜交になるように座つた。面と向かうよりその方がリラックasできるだろうという私の配慮からである。薄いグリーンワンピースに真珠のネックレスがよく合つている。髪を肩の辺りで切りそろえているのが初々しい。門本君は紺のスーツ姿である。自分は紺のスーツしか着ない、と格好つけたことを言っている

が、紺のスーツ一着しか持つていないのではないか。ネクタイはなかなか凝つた模様のものである。おそらく今日のために張り込んだのだろう。

味付けの淡泊な会席料理は日本酒に合う。一品一品が上品に小皿やお椀に盛られていた。いつかのビアガーデンの料理と大違いである。

早苗ちゃんは少々緊張しているらしく、自分の方から積極的に話しかけようとはしない。しかし、遠慮しながらも酒は勧められるままに飲んでいる。「秋はワイン」の門本君も、私がつぐや、たちまち盃を干す。小さな盃なのである。

釣書というほど大きなものではないが、簡単な自己紹介の文書は交わしている。それに基づいた質問を門本君がする。

「テニスをされるようですが、始められて何年にな

るんですか？」

「まだ二年ほどです」

二人に共通な趣味はテニスらしい。門本君が週一回のペースでプレイすると言えば、早苗ちゃんはうらやましがり、私は月に一回プレイすればいい方だという。テニスに関してずいぶん話が盛り上がり、今度大阪までゲンゼワールドテニスを観に行こうと話が進展していった。

テニスのことなど全く知らない私にとつて、トップスピンの得意やらグリップが厚い薄いやら、オムニコートは足が疲れないやら、ちんぶんかんぶんの会話がたくさんあった。ただ小さな球を打ち合うだけの簡単そうなスポーツなのに、どうしてあんな小難しい英語を使わなくてはならないのかと不思議だった。

不思議といえば、門本君の縁談が成立しないことも不思議である。容貌はまずまずだし、明るくて誠実でやさしい人柄である。確かに門本君には理屈つばいところはある。しかし、それも持論を述べているだけで、理屈といえるほどのものでもない。だとしたら、どこにその原因があるのか。

「どんな映画がお好きなんですか？」

今度は、早苗ちゃんの方から質問した。

「イタリア映画です」と答えた門本君は、イタリア映画のすばらしさについて話した。

「イタリア映画の人的なところが好きなんです。庶民感覚に溢れているというか……。何よりもバイタリテイがあるんですよ、人間が生きていくたくましさ。イタリア映画に比べて、フランス映画の場合はスクリーンの中で金持ちが遊んでいる感じで、

好きになれないんです。でも最近はイタリア映画も国際化して、独特の匂いが希薄になってきました。イタリア映画の神髄は、『靴みがき』や『自転車泥棒』や『鉄道員』など、終戦直後の白黒時代のものにあると思います。監督にもすばらしい人がいますよ。ロッセリーニ、フェリーニ、ビスコンティなど。

特に、ぼくはビスコンティの作品が好きなんです」

早苗ちゃんは、お酒のために上気して赤くなつた顔でうなずきながら聞いていた。どんな映画を観るのか、という門本君の質問には、テレビの洋画劇場を観ることが多い、と答えた。すると門本君は、映画は映画館で観なければ真にその映画を観たとはいえない、というようなことを言った。私はそのやりとりを（門本君、下手な持論は理屈と同じだよ）と心の中で忠告しながら聞いていた。

ともあれ、見合いは成功に終わったと思われた。一滴も飲めない私の妻を除いて、三人はほろ酔いかげんで料亭を出た。秋晴れの好天気ではあるが、午後三時半の太陽はそろそろ沈む準備でもしているのか、妙に頼りなげに輝いていた。ここからほど近くにあるK公園の方角から三々五々歩いて来る家族連れも家路をたどっているようだ。私と妻はこれから水いらずの時間を過ごすよう勧め、二人と別れた。

その日の夜、門本君に電話を入れた。あれからK公園を散策し、近くの喫茶店で小一時間ほど過ごし、夕方別れたということだ。あんなに可愛らしくてすてきな人が、なぜ自分のような三十半ばの男と会ってくれたのか、それが解らないとききりに尋ねるから、言つてやつた。男は年齢じゃないよ。

それに、君はけっこういい男だよ。笑顔がポール・ニューマンに似ていなくもない、と。

翌日、妻が早苗ちゃんの両親と会い、早苗ちゃんのほうもまんざらではないという情報を得てきた。「うまくいったらいいのにね」

妻の言葉に、私は何回もうなずいた。

三

十一月最後の日曜日朝、門本君が突然我が家に来て来た。来る時はあらかじめ連絡してからやって来るので、何か緊急の用事でもできたのだろう。意気消沈した態で、「すみません。あまりいい話じゃないんです。」と言う。茶の間で、妻といつしよに門本君の話に耳を傾けた。

お見合いの後、早苗さんと会ったのは、翌週の土曜日でした。その日はあいにくの雨で、昼下がりの街は暗くかすんだように沈んでいました。こんな日は映画に限るといっわけで、話題の映画『マディソン郡の橋』を観ました。映画を観ながら、この映画にしたことは失敗だったと思いました。独身の中年カメラマンと平凡な家庭の主婦が体験する四日間の激しい恋。純粹な恋愛とはいえ、中年男女の不倫を扱ったものだったのですから。隣の映画館で上映されていたアクションものにしたほうがよかったです。悔やまれましたが、後の祭りでした。

早苗さんは真剣な表情で映画を観ていました。そして、映画のラストにさしかかると、すすり泣きはじめたのです。周囲を見回しても、ハンカチで涙

を拭いている女性はいましたが、声を出して泣いているのは、早苗さん一人でした。どうしてこんなに泣けるんだらう、と不思議な気持ちになりました。そして、複雑な感懐が頭を支配しました。やはり、この映画は失敗だったともう一度後悔の念に駆られました。

映画の後、最近できたしやれたレストランで食事をしました。焼きたてのパンが自慢とかで、店に入つたとたん、香ばしい匂いが快く鼻を刺激しました。先ほどの涙は嘘だったかのような早苗さんの表情に安心したばかりは、さっそくワインを注文し、早苗さんと乾杯したのです。白い薄手のセーターが体にフィットして、見合いの日と違って、ずいぶん肉感的でした。

「メリル・ストリープって、あんなに太っていたかな

あ」というぼくの質問には首をかしげただけで、反対に、「アメリカでも、不倫した女性をあんなに白眼視するんでしょうか」と訊いてきました。ヒロインが村人から白い目で見られ、差別されるシーンばかりにも意外でしたので、「ほんとうだね。あれじゃ、日本の田舎よりもひどいよ」と答えました。先ほどの涙といい、この質問といい、ぼくにはどうも腑に落ちないものが残りました。

食事をすませて外に出ると、雨は上がり、妙に生暖かい風が吹いていました。人口十万人足らずの小都市であるK市も、土曜日の夕暮れはけつこうの人ざかりです。行き交う人たちを誘う飲食店のネオンが、華やかに点灯し始めました。

ワインの酔いがこちよく全身に染み渡っていました。その余韻が消えるのを惜しむかのように、ぼ

くたちはスナックに行きました。このスナックは、同僚と時々行く店でした。先客が三人いました。五十がらみの中年の男たちで、ダークスーツをきつちりと着込んでいます。彼らの話から、何かの記念式典に出席した帰りだと分かりました。どおりで、大きな祝い袋が奥の棚に置かれています。三人ともカラオケ好きらしく、懐かしい歌謡曲を歌っていました。

見合いの席で感じていたとおり、早苗さんはいける口でした。ぼくとほぼ同じくらいのペースで水割りのグラスを空けていた早苗さんは、ママの勧めで「イノセントワールド」を歌いました。ミスターチルドレンというグループが歌って、とてもヒットしている歌だそうです。

歌い慣れている歌い方でした。特に高音部分の

歌い方が巧みでした。三人の男性たちも、大きな拍手で早苗さんの歌唱力を褒めていました。この歌を歌い終わった頃から、早苗さんの態度が急に挑発的になつてきたのです。三人の拍手に素直に応えていない素振りをありありと感じ取つたのは、ぼくひとりだけではなかつたようです。

失礼な喩えなのですが、三人の中にカマキリが眼鏡をかけたような風貌の男性がいました。酔っているからでしょう。ぺらぺらとよく喋るのです。眼鏡をかけたカマキリが喋つたとしたら、たぶんこの人のようになるんじゃないかと思わせられるような、愉快で憎めない感じの人でした。そのカマキリ氏が、早苗さんに「歌お上手ですねー。相当歌い込めますねえ」と人なつっこい笑顔で褒めたのです。すると、早苗さんは「うるさいわねえー。あんたは！」

と、カマキリ氏をにらみつけたのでした。あつけにとられたのはカマキリ氏よりもむしろぼくの方でした。場が一瞬にして白けましたが、すぐにカマキリ氏がその場をとりつくろうように三橋美智也の『哀愁列車』という歌をかん高い声で歌い始めました。すると、早苗さんは、「古くさい歌を歌うな！酒がまずくなるじゃないのよー！」今度は先ほどとは比べものにならないほどの大声で怒鳴りました。カマキリ氏はかん高い声でけらけらけらと笑い、歌うのを止めました。

「それじゃ、門本さん、ビートルズの『レットイットビー』歌つてよ」とママが気をさかせました。ママの勧めに応じたぼくが『レットイットビー』を歌い始めると、早苗さんは、「どうして、英語の歌なんか歌うのよー！」と食つてかかつてきたのです。しまいにはマ

マにも絡み始めたので、勘定を済ませて、店を出たのでした。

早苗さんの足は、ひどい千鳥歩きでした。夕食時に飲んだワインと水割りがちゃんぽんになり、悪酔いしたのでしょうか。ぼくが体を支えようとする時、「触るな、このすけべ人間！」と下品な言葉で浴びせかけてきたのでした。酒が入ると、誰でも多少は人柄が変わります。酒乱の人も何人か知っています。しかし、それは男に聞かしてでした。女性のことのようなケースに接したのは、初めてだったので。それは激しい落差でした。普段の早苗さんからこの状態を想像できる人は、おそらくひねくれた想像力の持ち主といわねばならないでしょう。毒づく早苗さんをむりやりタクシーに乗せ、家まで送り届けました。

翌日、早苗さんから、「昨日のことは許してください、よく覚えていないのです」という内容の電話がありました。ぼくは、「たぶん悪酔いしたんでしよう。ぼくも飲み始めた頃は、酒の失敗をよくやらかしたものですよ」と早苗さんを慰めるための嘘をつき、今度の日曜日にもう一度会う約束をしたのです。

信じられない、という顔つきで門本君の話を聞いていた私と妻に、門本君はもつと驚くべき、決定的な事件を打ち明けた。

それからのぼくたちは、アルコールなしのデートを重ねました。会う毎にテニスをしました。早苗さんのテニスはお世辞にも上手とはいえないものでし

たが、フットワークのすばらしさには目を見張るものがありました。軽快に跳ねる早苗さんの脚を見ていると、ジャージのズボン姿が少々残念に思えてきたのでした。白いスコートを身につけた早苗さんの姿はどんなに素敵だろう。

テニスをした日はいつも好天に恵まれました。透き通るような青空の下、ぼくたちは黄色いボールを追いかけて走り回りました。疲れた体をベンチに休めていると、こないだのことなんかずいぶんささいなことのように思われてくるのでした。秋風が運んできた早苗さんのかすかな汗の匂いを嗅ぎながら、先生がピアガーデンでおっしゃった言葉を思い出していました。「もし君が可愛くて理知的な、だけど酒乱の女の子と恋をしたとしても、心配することはないよ。彼女と結婚するんだね。そして、生きる

んだ」そのとおりだと思いました。乗りかけた船には乗るべきだ。人生前向きに生きなければ進まない、と考えたのです。そう考え始めると、早苗さんとうまくやっついていけそうに思えてきました。

そもそも初めてのデートでスナックなどに誘ったのがいけなかったのです。早苗さんも適度の飲酒ならあんな酒乱状態には陥らないはずです。それに、何も酒が人生のすべてではないのです。人生には、ほかにもたくさん楽しみがあります。それを二人で探していけばいいじゃないか、と考えたのでした。ぼくの胸には、早苗さんを人生の伴侶として考える熱い心が兆し始めていたのです。

テニスばかりというのも能がないので、十月最後の日曜日には京都までドライブしました。車内から見る丹波の山々は、美しく紅葉していました。そ

の日の早苗さんはいつもよりよく喋りました。時にははしゃぐことさえあったほどでした。

嵐山の渡月橋界隈を散策した後、広隆寺、竜安寺、金閣寺と観て回りました。竜安寺の京料理を食べさせる店で昼食をとった時、ぼくはどういう早苗さんにプロポーズしました。結婚してください、というぼくの言葉に、早苗さんはぼつと頬を赤らめ、うなずいてくれたのでした。

しかし、この京都へのドライブ以降、早苗さんはぼくと会うのを避けるようになりました。デートに誘いかけても、早苗さんの電話からはすげない返事しか返ってこないのです。なぜ会ってくれないのか、理由は分かりませんでした。こういった状態が三週間以上も続きました。

早苗さんのお宅に伺おうと決心した矢先の一

昨日のことでした。いつものとおり八時過ぎに出動したばかりは、仕事机に座る前に、ソファで煙草を吸っていました。そこに夜勤明けの西垣君がやって来て、「門本さん、昨日は大変だったんですよ」とニヤニヤ笑いの中に苦笑を混じえながら、昨夜の救急業務のことを話し始めたのです。西垣君というのは、昨年入署してきたまだ二十歳前の若者で、ぼくとは妙に気の合う間柄でした。

十一時過ぎに緊急電話が入り、西垣君は当直の沖本さん東さんの三人で現場へかけつけた。スナックの中に入ると、額に包帯をした中年男性がボックス席に横たわっており、渴いた血が目もとから額にかけてこびりついている。泥酔状態とショック症状で、男は何も喋らない。スナックのママが施してく

れた包帯を外し、傷の応急処置をする。傍らで、目を泣きはらした若い女性がうなだれて座っている。その女性も相当に酔っており、呂律の回らない口でなにやらぶつぶつ言っている。その女性を沖本さんが知っていたようで、高橋さん！と呼びかけたが、反応がない。この女性と沖本さんとは高校の同級生だったのである。陸上部の美人スプリンターとして校内で評判が高かつたらしい。現在は、「フルーツタカハシ」の看板娘で、名を早苗という。彼女が以前勤めていた建設会社の部長と久しぶりに会い飲んでいた時、激しい口論の末、部長を突き飛ばした。不安定な止まり木から転げ落ちた部長は、トイレの前の階段の角にしこたま頭をぶつけ、額を切った――。

どこにでもある不倫の結末でしょう、と簡単に西垣君は片づけてしまい、来週の休暇にはぜひ釣りに行きましょう、と言い残して席を立つたのでした。

西垣君の話聞いて愕然としましたが、ありうることだと思いました。いつかのスナックでの一部始終を思い出したからです。部長と早苗さんがどんな仲だったのかということまでは分かりませんが、このスナックで二人が時々飲んでいたことは確からしいのです。明るい早苗さんの表情にふと翳りが生じることがありましたが、それはこの部長との関係から来ていたようです。もちろん、西垣君にはぼくと早苗さんとの関係は伏せておきました。

門本君の話聞いていた妻の驚きようはひどく、

聞こえてくるのはただため息ばかりで完全に言葉を失っていた。

門本君は話し終えると、私と妻に謝った。私たちの方こそ、謝らなければならぬ立場なのに。

それにしても、何という早苗ちゃんの変わりようだろう！かわいらしい猫が犇猛な虎に変わる。酒というやつは怖いものである。私の場合、酔うと無性に楽しくなり、みんな友達！と叫びたいような気持ちが高じてくる。門本君も酔うほどに饒舌となり、話題にこと欠かない楽しい酒である。

昼食を食べるよう勧めたが、今日は勘弁してくださいというので、送って外に出る。曇り空からぱらぱらと雨が落ちてきた。門本君の愛車は雨をはじきながらゆつくりと走り始め、やがて家並みに消えた。雨脚が速まり、大粒の雨がたちまちのうちに舗

道を黒く染めた。

かくして門本君の短い恋は終わった。十三回目の見合いを成功させようと意気込んでいた私の目論見も、もろくも崩れ去った。

門本君は理屈屋だから女性と縁がないわけではない。おそらく女性運に恵まれていないのだ。ひよつとしたら、門本君はファイヤーマンだから、火事を消すだけでなく恋の炎まで消す性癖が身についてしまったのではあるまいか。

とにかく乗りかけた船だ。門本君が無事結婚という名の港にたどり着くまで見届けたい。そして、私の人生における初の仲人というやつを体験してみるのも悪くない。



「病気になつて

魅華

朝早い電車に主人と乗る。これから旅行に出かけるかのように。3か月に一度、京大まで検査結果を聞きに行つてゐる。

主人は、一昨年の春前立腺がんを告知された。見つかつたときには手術もできない状態で、精巢にまで浸潤していたので投薬と放射線の治療を受けた。PSAの数値も高く正常値4をはるかに超え、147もあり骨に転移してないことが奇跡のように思へた。

昨日はいつになく再発の不安が頭をよぎつた。前回、それまで緩やかに安定していた数値がやや急

に上昇していた。主人はなおさらだろう。顔にもかげりがある。祈る思いで病院へと向かつた。予約時間の40分前に着き、いつも行つてゐる全快地蔵さまの所に行き、ふたりで手を合せて願つた。時間までコーヒーを飲み、呼ばれるのを待つた。主人の心臓の鼓動が聞こえてきそうだった。私もハラハラ、ドキドキ緊張が続く。落ち着かないので、冗談を言ふと笑つてくれた。いつもならすぐに経つ時間がなかなか過ぎない気がした。

いよいよ呼ばれ、先ずは放射線科の医師の待つ部屋へと入つた。前回急に数値が上がつたので、今回はもう一人泌尿器科の医師も診てくださることになつてゐる。中に入り椅子に座つていち早くパソコンの画面に目をやる。折れ線グラフが下降しているのが見えた。

医師が「よかつたですね、下がつてますよ。こういうこともあるんですよ、一旦上がつてもまた下がる

ことが」とおつしやつた。

「ありがとうございます。」

部屋を出ると「全身の力がぬけそうだ」と主人が言う。泌尿器科の医師にも同じことを言われ心から安堵した。

普段の暮らしの中では減多に感じられない緊張感に、生かされると改めて思う。元気に普通に暮らせるだけでありがたいとも思う。家族が病気になるなければ、心から思えなかつたかもしれない。

全快地藏さまにお礼を言い、外に出た。空を見上げると雲の中にも真つ青な青空、まるで今の心境のようだった。深く息を吸い吐き、青空は人の心に元気をくれると改めて思った。心がやつと解放された。

肩を並べて歩いていると、「結果がいよいよ悪ければ、明日の出張はやめようと思つていたのだが」と

言った。

入社して32年間、出張を断るなど一度も口にしたことがなかつた人が、ここまで考えていたのか：我慢強く、くよくよしない人なので本当に助かっているが、本人は不安な気持ちとどれだけ葛藤していることだろう。

しかし主人が病気をして小さなし・あ・わ・せを感じることもある。

一緒にテレビを見ながらお菓子をつまむとき。結果がいいと必ず行くお寺めぐりの楽しさと、おいしいお昼を二人で食べるとき。肩を並べて散歩しているとき。

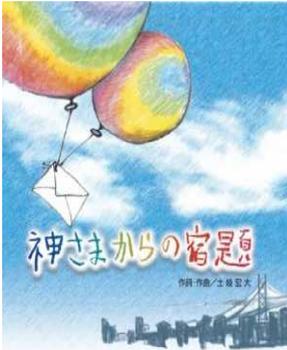
このまま時が止まってくれたらと、感傷的なことを思う日もある。涙がでる。その涙をぬぐいながら、前を向おうと思いなおす。また3か月ごとに一緒

に病院に行こう。これから6年間それが続くけれど、いや生涯不安な気持ちが続くだろうが。それだけに夫婦の絆はいつそう深まることと思う。

※PSA検査は、もつとも精度が高い前立腺がんの検査です。

採血のみの検査で、血液中にある前立腺に特異的なタンパク質の一種の値を測定します。(編集注)





F O P

しんこうせいこつかせいせんい いけいせいしよ
進行性骨化性線維異形成症 (Fibrodysplasia Ossificans Progressiva : FOP)とは結合組織に発生する稀な遺伝子疾患。発症率は200万人に1人。筋肉などが骨に変わります。

◆明石でも市立明石商業高校1年生の山本育海君がFOPです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し、ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

◎「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。
ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせは『いっくんを応援する会 - FOP明石 - 』

事務局 office@fop-akashi.jp (メール)

◆<http://fop-akashi.jp/office/> (HP)

◆絵本やCDの販売も行われています。(点字版もあります。)
絵本は1冊500円(送料別 - 3冊まで送料: 飛脚メール便で80円)

メール ehon@fop-akashi.jp

D-FAX 020-4622-7570

◎申込方法: メールまたはFAXにて、お名前、郵便番号、住所、電子メール、電話番号、注文部数を明記の上、お申し込みください。

◎学校での教材セットもあります。お問い合わせ下さい。

卒園に向けて

ゆきんこ

待てど暮らせど生まれにくれず、娘の悲痛な顔が今でも忘れられない。

今から七年前の五月二十三日の午後、産声をあげた初孫りおん、陣痛がきて三日目のことだった。「母子共に元気です」と聞いた時は腰が抜けそうだった。どれだけ安堵したことか。どちらかが体が弱かつたらどうなっていたことだろうと思うと怖ろしい。

産院にいた時にはスヤスヤ眠っていた子が、退院してからは昼も夜もよく泣いていた。代わる代わる抱きはするものの、睡眠不足が産後の娘の体にくたえ体調を崩した。家事をしながら夜泣きする孫を、次女と代わる代わる抱き毎日を乗り切った。つくづく、たまに来る孫は可愛いが、夜通し泣き続け

られる子を毎日お守りするのには、こりごりだと思つた。その上、後で分かったことだが乳糖不耐症で下痢が続いた。そういうこともよく泣く原因だったのだろう。大変な日々が長く、長く続き、体は疲れ切り気も疲れて主人にあたることもよくあつた。

そうしていると、娘婿のお母さんが面倒をみましようと言つて下さり、安堵した。心からありがたかつた。

娘たちがいなくなつた後、忘れられたおもちゃを後になつて見ると無性に寂しくなつた。あの頃は必死だったが、振り返るとお風呂呂に入れてる時が癒やされた。小さな手や足をそつとガーゼでこすると、びくつとして可愛かつた。

娘たちもこんなにかさかつたんだなど、改めて思つた。

時が経つにつれ、心配した娘の体調も徐々によくなり家に帰れるようになった。それでも気になつ

たので、りおんの顔を見がてら娘の家に行った。しばらく見ない間に寝返りができるようになったり、お座りもあと少しでできそうだった。休日になると主人も加わり、小さな存在に癒やされ笑うことが多くなった。やつと孫のいるしあわせを実感できた。

いつの頃からか男の子の特性が見えてきた。玩具はバスや、電車などの乗り物が好き、座ってパトカーを動かしながら片言で「パツカー、パツカー」と言っていた。絵本も好きでよく読んであげた。同じ本を何度も読まされた。

少しおしゃべりができるようになると、娘が寝る前に今日したことを聞いていたそうだった。男の子にしてはおしゃべりな方だった。年齢が上がるにつれ言葉がたくみなことに、何度も驚かされた。

二歳、三歳と成長が目まぐるしかった。ボール蹴り・ボール投げ・滑り台・ブランコ・砂遊びを喜ぶので、すべて付き合いくたびれた。孫にパワーをもらい、

用事のある時以外は子守をかってでた。

そして四歳になった頃、娘が働き始めたので、保育園に通い始めた。初めて母親から離れたので毎日泣いていた。お迎えに行くと「バーバの顔を見たら涙がでた」と言ったこともあった。彼なりに頑張っていたのだろう。

その子も翌年にはすっかり保育園に馴染み、お友達も増え園の生活を楽しんでるようだった。ただ平和主義者なので、叩かれても、叩き返すこともせず、お友達だからと言うばかり。性格や育った環境がみえてくる。

今こうして振り返っていると思い出すが、敬老の日の参観。ピアノ演奏をした後に、歌を歌ってくれ、その後肩たたきの歌を歌いながら肩をたたいてくれた。「♪おばあさん、お肩をたたきましょう。タントン、タントン、タントントン：：♪」内心そんな年じゃないわよ（笑）と思いながら、赤ちゃんの頃から手をかけてきたことや、ばばっことだったことなどが

思い出されて涙がでた。大きくなったことが嬉しかった。

大きくなったと言えば、去年の運動会を思い出す。プログラムを見て種目の多さに驚いた。リレー・組体操・和太鼓・玉入れ・竹馬・跳び箱と盛りだくさん。

夏の暑さが厳しい中の練習で疲れていたのか、「赤ちゃんに戻りたい。保育園に行かなくて済むから」と珍しく弱音を吐いていた。「背伸びして頑張ってるもんね」優しく肩を抱きしめた。それも乗り越え、冬の生活発表会も可愛い演技を見せてくれていた。

そしていよいよ、後一週間したら保育園を卒園する。娘夫婦の胸には、さまざまな思いが込み上げてくることだろう。

おめでどう！！りおん。ホントによく頑張ったね。

春から一年生。ランドセル姿を見ると感動するよ、ジージとバーバは。

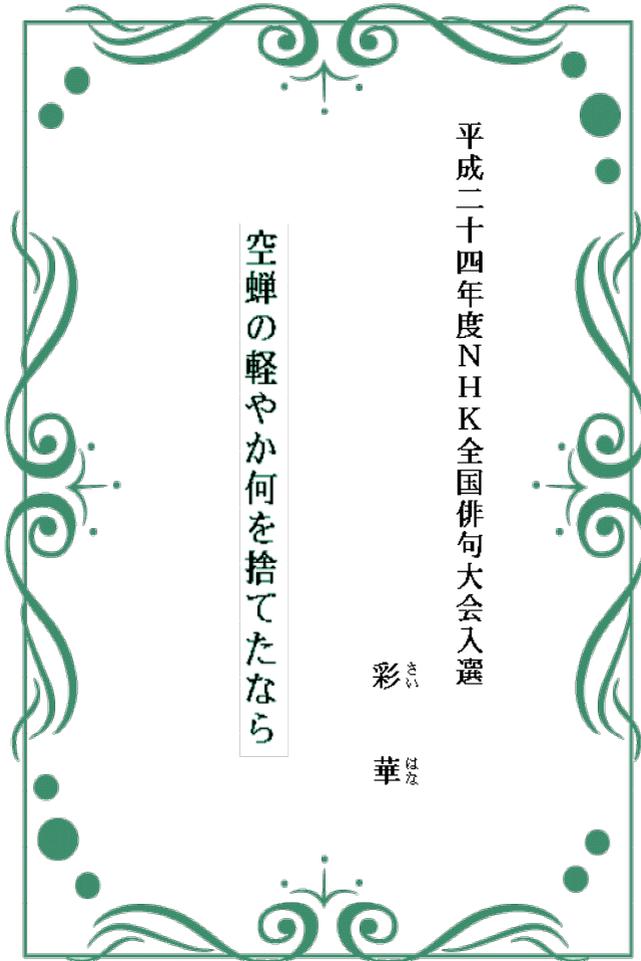
これまでの歳月は決して平たんではなく、心配もし支えもしてきた。娘夫婦のいざこざが、りおんに悪影響を与えないかと気を使うことが何度もあった。

しかしおかげと、素直にのびのびと明るく育っている。お友達思いで、年下の子にも優しくできるお兄ちゃんのような。

これからも、今のまま新しい環境にも馴染み、色々なことを乗り越えたくましく育って欲しい。

いつもジージとバーバは見守っているからね。





平成二十四年度NHK全国俳句大会入選

彩 さい

華 はな

空蝉の軽やか何を捨てたなら

花吹雪

彩さい

華はな

悠々と枝を拡げて花満開

此処に桜が一本あるだけでいい

花の下愛を語るに眩しくて

城山の桜トンネル 誰を待つ

潜り抜ける 桜は低く枝垂れて

花吹雪 何をそんなに急いでか



しんだか：

大西亥一郎

親父が死んだ

八十二年の生涯だつたから

平均寿命より長くて

数字としては幸せなんだと思う

親父の母は連れ子をして

日露戦争から帰った親父の父と再婚したらしい

その連れ子は親父の腹違いの兄になるが

幼い頃に養子にやられて

親父とは全く別の人生を歩んだらしい

らしいらしいというのは

もう半世紀も前に

親父の母の財産

といつても小さなしもた屋だが

それを勝手に処分したとか

しないとか

喧嘩別れをして

その後

阪神淡路大震災もあり

生き死にも判らない

親父にしてみれば

ろくに話したこともない

兄貴のことなど

知りたくもなかったのだろう

そんなわけで

親父は 独りっ子のよう

大切に育てられた

大正生まれには珍しく

商業高校出身

それが辛い 大銀行に入ったが

それが不幸のはじまりで

仕事のストレスから

毎日毎日午前様
アル中もどきになり
目が据わり
家ではおふくろを殴り
包丁を持ちだし
ちやぶ台をひつくり返していた

長男の私にとつては
もの凄いストレスで
両手の爪噛みは
皮膚を食いちぎり
血まみれになつてもなお食いちぎり
弟と二人
親父など死ねばよい
どころか
刹那には
ころしてやろうか
とまで

しかし

親は親

せいぜい

親父の

おふくろに向かう

拳の前に立ちふさがるぐらいで

それがおとなまで続いた

不幸のはじまりはまだまだあつて

私が目出度く高卒後

親父は人のよさから断れず

銀行員でありながら

中小企業の借金の

連帯保証人

まさにまさに

絵を描いたように

社長は行方をくらまして

親父はみごとに免職で

小さな住居も取り上げられて
おふくろ米びつ眺めつつ
食べる米ない生活へ

でもまあ

やっぱり

根は真面目

倉庫番をしたあととは

六十五歳で高速道路の料金徴収員

お酒も少しはましになる

それでも時にはおふくろを

殴りつけてはいたようだ

苦勞をいつばい背負い込んだ

おふくろは

介護度五で この世を去り

親父は独り二年間

八十ころから認知症

なんとか私は息子と判り

運よく入れた老健施設
時のゆくまま 生き続け
息子の私の

週に一度のご訪問
ほんの短い時間をば

「どうや」

「なんかいるか」

「ほな また来るわ」

或る日

親父の目に光がともり

「イイチロウ」と私の名

孫のことを色々

あらら認知症が治ったか

思っていたら三日後に

親父死亡のお知らせが

静かだったし

穏やかだったし
おふくろを殴り
妻子を路頭に迷わせ
酒に酔つて据わつた眼は
閉じられていて
夢を見ているようだった

葬祭場の湯灌に清拭
私が一番前にいて
背後に私の息子たち
親父の顔を見ていたら
不意に瞼が熱くなり
目の玉ふくれて
爆発し

おいおいと
とめてもとめても
おいおいと

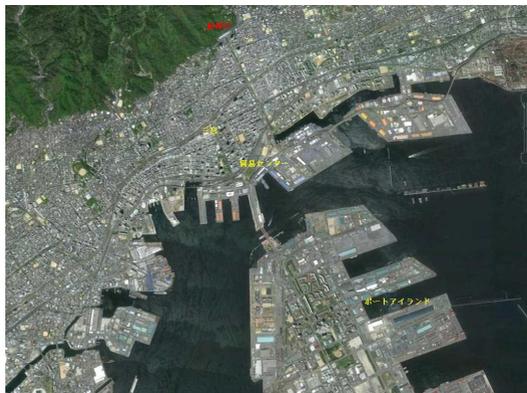
還暦男が泣き出した

悲しかったのではないのです
寂しかったのではないのです
終わつた安堵感でもありません
でも遠慮なく、大の男が
おいおいと
充分喚いて泣きました
それで
しんだかと思つたのです



アクトス写真館

真ん中の島は神戸のポートアイランド。
右下の焦げ茶のビルは兵庫県庁の建物群です。遠くに見えるのは紀伊半島でしょうか。私は神戸生まれの神戸育ちですが、こういう位置から神戸を見ることは余りありませんでした。下図の真ん中が第4突堤で、そこからつながつて下の3分の1切れた島がポートアイランド。勿論、私の生まれた半世紀以上前には、まだ海でした。



◆ ショートショート

原稿用紙 130

高阪博一

原稿はいつもワードで書いている。保存上の名称は『原稿用紙 - 数字』で、この数字が書いた数カスを表している。三十作目という事だ。よくここまで辿り着いたものだ。

平成二十一年一月十四日の朝日新聞・週刊播磨に掲載された大西先生の『アクトス』紹介記事がご縁となった。その記事に「デジタルデータで」と書いてあった。

わたしは字が下手だ。丁寧に書こうと心掛けているが、拙い字に変わりはない。どう鼻屑目にみても、上手とは言えない。これは自分だけだと思うのではない。息子が小学生の頃、親の署名をわたしがあると、嫌な顔をした。自分が書いたと間違えられると言うのである。つまり、自他共に認めるということだ。

手書きをしないで良い事がどれ程わたしに勇気と希望を与えたことか。「それなら、書けるのでは」と無謀にも思ってしまった。もう、あれから四年の

歳月が流れた。下手な字であることが、書く事に
繋がったなんて、妙なものだどつくづく思う。

了

なにしてる 地獄シリーズ1

大西 亥一郎

まいにちまいにち あそんでござる

明日の仕事の打ち合わせ 嫌みな課長の

いけめん顔 いけないお面でございます

どうしてなれます ソンビづら

家では子どもが万引きを 父は寝たきり

つま 家出 家賃滞納 三ヶ月

稼ぎに追いつく 貧乏あり この頃少し追い

抜かれ じつとみつめる シミ出た手

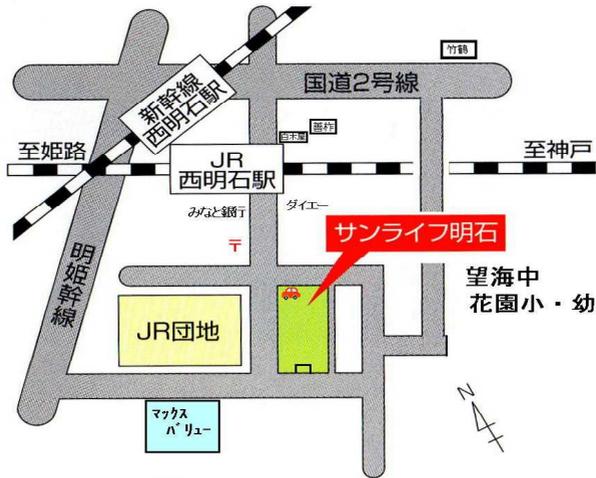
それでも 楽しい 地獄の日 なれば熱さも快適に

ここしか知らない 遊びの日

あなたも一緒にどうですか

「怖いお話」





◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

◆合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合はご注意ください。●手帖などにお控え下さい。●出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号(第19号)の原稿締め切りは6月末必着です。

5月例会は18日(土)です。

7月例会は20(土)です。ご予約下さい。

◆HPに、18号までを、PDFファイルで掲載しました。

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>
(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきます。)

◆入会するには◆

- ① 会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ② 〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、海外からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加できなくても、HP・掲示板などで状況を知ること可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>

アクトス 第18号

平成二十五年五月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円